

2021年度(第17回)

こども環境学会賞の受賞者紹介

Association for Children's Environment

顕彰委員会委員長 高木真人、論文・著作賞選考委員長 高橋 勝、デザイン賞選考委員長 竹原義二
活動賞選考委員長 神谷明宏、自治体施策賞選考委員長 田川正毅

2021年6月より公募致しましたこども環境学会の学会賞につきましては、2021年10月末までに論文・著作賞7件、デザイン賞10件、活動賞3件、自治体施策賞1件のご応募をいただきました。

選考委員による厳正な審査の結果、論文・著作奨励賞1件、デザイン賞1件、デザイン奨励賞3件、活動奨励賞1件、自治体施策奨励賞1件、以上合計7件が選定されました。

受賞者および総評・講評は以下の通りです。(順不同、敬称略)

●各賞受賞者

こども環境学会賞 論文・著作賞

《論文・著作賞》 該当なし

《論文・著作奨励賞》

◆根ヶ山光一(早稲田大学名誉教授)

家庭環境における母子の身体接触遊び行動
— 日英の縦断的比較 —

こども環境学会賞 デザイン賞

《デザイン賞》

◆甲斐弘美(つくし会)、前田圭介(UID)

こどもえんつくし ダイニングホール棟
foresta カランころ

《デザイン奨励賞》

◆橋口剛(HAG環境デザイン)、
平慶生(女の都幼稚園保育園)
女の都幼稚園保育園

◆相坂研介(相坂研介設計アトリエ)
てぞーろ保育園

◆東海林健、
平野勇氣(株式会社東海林健建築設計事務所)、
社会福祉法人大地会(山五十嵐こども園)、
田中哲也(田中哲也建築構造計画株式会社)、
内藤真理子(コモレビデザイン)、
佐藤将之(早稲田大学人間科学部教授)
山五十嵐こども園

こども環境学会賞 活動賞

《活動賞》 該当なし

《活動奨励賞》

◆照山龍治、木村典之、幸野洋子、山崎朱実、
塩月孝子(「地域の色・自分の色」研究会)、
秋田喜代美(学習院大学)

色という視点で、身の回りから、子供たちと、
ふるさとの宝物を掘り起こす取り組み
(地域教育・地域振興に向けて)

こども環境学会賞 自治体施策賞

《自治体施策賞》 該当なし

《自治体施策奨励賞》

◆東広島市長 高垣廣徳
関係機関が一体となった乳幼児教育・保育の
質向上に向けた取り組み

以上が受賞されたものですが、選考に漏れた方々におかれましても受賞者に劣らないすぐれた学術活動や実践活動であることを申し添えますとともに、さらに一層の活躍を祈念いたします。また更に多くの会員の皆様が次回の学会賞に応募されますことを期待いたします。

各賞の対象と選考委員

(1) こども環境論文・著作賞

近年中に完成し雑誌などに公表された研究論文および出版公表された著書・著作であって、こども環境学の進歩に寄与する優れたもの。

選考委員

委員長 高橋 勝（東京福祉大学大学院教授／横浜国立大学名誉教授・教育哲学）
（委員）河原 啓二（社会医療法人財団聖フランシスコ会顧問・公衆衛生）
（同）住田 正樹（九州大学名誉教授／放送大学名誉教授・発達社会学）
（同）福岡 孝純（日本女子体育大学招聘教授・スポーツ環境）
（同）仙田 満（東京工業大学名誉教授・建築）
（同）矢田 努（愛知産業大学名誉教授・建築）
外部委員 中田 基昭（東京大学名誉教授・教育方法学／幼児教育学）

(2) こども環境デザイン賞

近年中にデザインされた環境作品（建築・ランドスケープ・インテリア・遊具・家具・グラフィックその他）であり、こども環境学的見地からも高い水準が認められる独創的なもので、こどもの成育に資することが認められるすぐれた環境デザイン。

選考委員

委員長 竹原 義二（神戸芸術工科大学客員教授／無有建築工房・建築家）
（委員）佐久間 治（九州女子大学特任教授・建築学）
（同）小池 孝子（東京家政学院大学教授・住居計画学）
（同）千代章一郎（島根大学学術研究院教授・建築学）
（同）鮫島 良一（鶴見大学短期大学部准教授／同附属幼稚園園長・彫刻家）
（同）福岡 孝純（日本女子体育大学招聘教授・スポーツ環境）
（同）松本 直司（名古屋工業大学名誉教授・建築学）
外部委員 手塚 由比（手塚建築研究所・建築デザイン）

(3) こども環境活動賞

こども環境に寄与する、上記以外の活動（施設運営・行政施策・社会活動・その他）であって、近年中に完成した業績および継続的な活動によってその成果が認められた活動。

選考委員

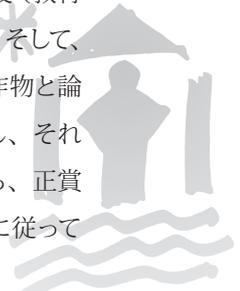
委員長 神谷 明宏（聖徳大学児童学科准教授／NPO 法人コミュニティーワーク研究実践センター理事）
（委員）小澤紀美子（東京学芸大学名誉教授・住環境教育／まちづくり教育）
（同）北方 美穂（日本フィンランド協会事業推進委員・編集／執筆）
（同）新田新一郎（プランニング開代表／NPO 法人みやぎ・せんだい子どもの丘副理事長）
（同）齊藤 ゆか（神奈川大学人間科学部人間科学科教授・生涯教育／ボランティア／NPO）
（同）西野 博之（NPO 法人たまりば理事長／川崎市子ども夢パーク所長／フリースペースえん代表）
外部委員 柳下 史織（公益財団法人東京 YWCA 青少年育成事業部統括責任者・教育キャンプ／
外国ルーツ青少年の日本語学習支援／リーダー養成／国際に関すること）

(4) こども環境自治体施策賞

こども環境に寄与する行政施策であって、近年に完成、完了した施策、若しくは継続中の施策でその成果が認められるもの、又は近年に着手された施策で、顕著な成果が生じ始めていると認められるもの。

選考委員

委員長 田川 正毅（東海大学教授・建築学）
（委員）五十嵐 隆（国立成育医療研究センター理事長・医学）
（同）佐久間 治（九州女子大学特任教授・建築学）
（同）高木 真人（京都工芸繊維大学准教授・建築学）
（同）平野 義文（岩見沢市議会議員）
（同）三輪 律江（横浜市立大学大学院都市社会文化研究科教授・建築／都市計画）
（同）松本 直司（名古屋工業大学名誉教授・建築学）
（同）河原 啓二（社会医療法人財団聖フランシスコ会顧問・公衆衛生）
外部委員 柳田 良造（岐阜市立女子短期大学名誉教授・建築学／農村計画）



総 評

こども環境 論文・著作賞

高橋
勝

論文・著作賞
選考委員長

本委員会では、今年度も7名の選考委員に加えて、中田基昭・東京大学名誉教授（教育方法学、幼児教育学）に外部審査委員をお願いして、計8名で選考委員会を構成した。そして、本審査に入る前にZoomで選考委員会を開催し、前々からの懸案事項であった著作物と論文の審査方法について協議した。その結果、著作物と論文をいったん分けて審査し、それぞれに順位をつけた上で、最後の選考委員会の場で、両方の評価点を勘案しながら、正賞と奨励賞を最終的に決定するという手順が決められた。今年度からは、この手順に従って進めることとなった。

以上の経緯から、選考委員会では、著作と論文を分けて審査することに決めていたのですが、その態勢で応募作品の選考に臨んだが、今回は、著作物はなく、論文のみ7編という応募結果であった。したがって、審査手続きに関しては、これまでと変わらない方式を進めてきた。変化があったのは、選考委員の織田正昭先生（元東京大学教授）が、審査手順を決めるZoom会議には出席してご意見も頂けたが、実際の審査に入る12月には入院されたので、審査をご辞退されたことである。急なことなので、委員補充の余裕がなく、やむなく7名の選考委員で審査を行った。前述のように、今回は論文が7編なので、7編の論文を全委員に査読を依頼し、10点満点で採点した結果とその詳細なコメントを提出して頂いた。さらに、Zoomによるオンライン選考委員会を開催し、率直かつ厳正な意見交換を行った。審議の結果、今回は、残念ながら論文著作賞に該当する論文はないと判断し、次いで高い評価を受けた後述の論文1編を奨励賞に選出した。

今年度の応募論文の特徴は、「家庭環境における母子の身体接触遊び行動」、「幼児期の遊び経験に関連する生活状況・家庭環境要因の検討」、「震災後の遊びの実態と課題」のように、家庭や地域における子どもの遊び経験の質を問うものが多く見られたことである。小学校4年生の児童が牛乳パックを用いて家の間取りの模型を作り上げるプロセスを調べた研究も、子どもの作業経験の質を問うものと見ることができる。家庭であれ、地域であれ、幼稚園や学校であれ、子どもが育つ場所を、物理的な空間配置として数量的にのみ捉えるのではなく、その場所を生きる子どもの内的な経験（生きられる経験）の生成として質的に読み解く研究が多く見られたことは、これからの子ども環境学研究の一つの方向性を示しているようで、大変興味深かった。

今回、奨励賞に推挙された論文「家庭環境における母子の身体接触遊び行動」は、サブタイトルに「日英の縦断的比較」とあるように、家庭という場所で、生後4か月の乳児と母親との身体接触の特徴を比較した研究で、母子の身体接触という質的経験において、日英の養育文化の違いによって微妙な差異が生じることを明らかにしている。子ども環境は、自然的、物理的環境の違いだけでなく、文化的な、さらには社会階層的な違いによっても、子どもの経験の質にさまざまな食い違いを生じさせる。それは、東日本大震災やそれによる福島第一原子力発電所事故による被災地の子どもの遊びの内容にも大きな影響を及ぼすことが明らかにされている。そしてまた、今回応募された障がい児の放課後の居場所づくりに関する研究からも、「インクルーシブな居場所」を創り出すには、子どもの経験の質の多様性を広く許容できる場所づくりが求められることが示唆されている。いずれの論文も大変読み応えがあったが、母子の身体接触遊び行動に関する研究は、文化環境の違いが、母子の接触遊びにも違いを生じさせることを明らかにしている点で高い評価を受けた。ただし、サンプル数が日英7家族ずつという少なさが客観性にもう一步という評価もあり、審議の結

果、全委員一致して、奨励賞に十分合致するという結論に至った。

以上が、論文著作賞の選考結果と論文「家庭環境における母子の身体接触遊び行動」が奨励賞に選ばれた経緯である。

■最後に、前述した織田正昭委員の急な訃報に接したので、一言、お悔やみの言葉を述べさせて頂きたい。織田先生は、本学会の副会長を務められると同時に、この学会賞・論文著作賞の制度が出来上がった時の初代委員長である。選考の基準や内規の原案作成にも携わられた。医学者ということもあり、統計処理にも詳しく、毎年度最後の選考委員会では、応募論文に対する選考委員の評価の非常に詳しいデータを数字で示され、論文の査読と評価の範となるような選考会議を運営して下さった。後を引き継いだ私は、判断に迷う時に、度々織田先生にご相談することがあった。ご多忙のさなかであったはずにもかかわらず、先生は、毎回短時間のうちに懇切丁寧なご意見を寄せて下さった。本委員会の運営だけでも、織田先生には、どれだけ助けて頂いたかわからない。感謝の気持ちと共に、心からご冥福をお祈り申し上げたい。



根ヶ山光一（早稲田大学名誉教授）

家庭環境における母子の身体接触遊び行動

— 日英の縦断的比較 —

（『こども環境学研究』Vol.16, No.2, 2020）

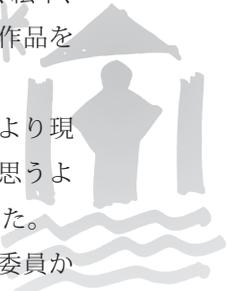
本研究は、日本の東京都、埼玉県、英国のスコットランドに住む各々中産階級の母親各7名とその4ヵ月乳児を対象にして、母親の乳児への身体接触の特徴を比較調査したものである。著者は、4ヵ月齢に達した乳児を育てる14家族を、12ヵ月齢になるまでの間、2ヵ月ごとに5回訪問し、10分間ビデオカメラで母子が遊ぶ様子を撮影し、母子の行動を詳細に分析した。その結果をまとめると、①調査をはじめて6ヵ月間に、英国の母親の乳児との接触時間は徐々に減少することが有意に見られたが、日本の母親は接触遊びの減少は有意には見られなかった。②英国では、母親の乳児の接触遊びが徐々に減少するが、それに代わって、乳児が玩具と遊ぶ時間が増えていく。つまり、母子が向き合う〈母—子〉という二項関係の遊びから、〈母—モノ—子〉という三項関係の遊びへと徐々に広がりを見せていくことが明らかになった、という。

以上の調査結果を見ると、日本では、1歳までの間には、母子の接触行動という二項関係が文化的に重視されているのに対して、英国では、母子の間に玩具（人形などのモノ）が徐々に介入することで、〈母—モノ—子〉という三項関係が文化的に重視されている、という養育文化の違いが浮き彫りになる。さらに、日本の母親の二項関係的な子どもへのかわり方は、子どもが三項関係が可能になる時期になっても継続されていることも示唆されている。ここには、アタッチメントや幼児の社会性の獲得への導入の微妙な文化的な違いも示唆されており、養育環境の文化比較という点からも、大変興味深い研究である。

ただし、上記のように、サンプル数が英国、日本とも7件で、いずれも中産階級との限定はあるものの、東京都、埼玉県、スコットランドの住居の間取りや母親の学歴の違いなど不確定要素も混じっているため、調査条件の統制にはなお一層の工夫が必要であると考えられる。

以上の理由から、本論文は、論文著作賞の奨励賞の資格に十分合致すると判断した。

（高橋 勝）



総評

こども環境デザイン賞

デザイン賞
選考委員長
竹原 義二

こども環境学会デザイン賞は子どもの視点に立つ建築、造園、遊具、プロダクト、絵本、グラフィック等さまざまなデザイン領域の総合的な評価により優秀なデザイン作品を表彰するものである。

17回目となる今年度は応募作品が10点あり、8名の選考委員の書類審査により現地審査を行う4作品を選出した。コロナ禍により昨年同様、現地審査の日程が思うように決まらなかったが、今年も関係各位の協力により何とか期限までに実施できた。

リモート開催となった最終審査会では全員出席の中、現地審査を担当した各委員から作品の講評があり、リモートではあるが活発な質疑応答を経て充実した討議を重ねることができた。そして、全員一致でデザイン賞一作品、デザイン奨励賞三作品が選考された。

デザイン賞に選ばれた作品は建築と外部空間、さらには地域との一体性に優れた作品であった。奨励賞の三作品は外部との関係性という点では及ばなかったが、いずれも優れた作品であった。コロナが収束する気配がない中、地域との関係は薄れゆく一方である。今後も子どもの成育に必要な本質を見極めながら新たなデザインへの挑戦を続けていただきたい。

最後に、デザイン賞、奨励賞を獲得なさった作者に敬意を表するとともに、本デザイン賞に応募、推薦をしてくださった皆様に深く感謝する。

甲斐弘美(つくし会)、前田圭介 (UID)

こどもえんつくし ダイニングホール棟 foresta カランころ

「こどもえんつくし」は、1948年に開設されたつくし保育園を前身とする幼保連携型認定こども園である。地域の中でいち早く0歳児保育を開始し、働く親を支える施設として地域に認知されてきた。

園の隣地を取得して建設されたダイニングホール棟は、道の突き当りに正面を合わせ、立ち並ぶ住宅に隠されてしまった旧園舎に変わって、新しい園の顔としての役割を果たしている。十字型に木材が配置された特徴的な柱は、建物内部だけでなく外部にもその姿を現しており、ダイニング空間の吹き抜けに立ち並ぶ柱は、子どもたちの視線と領域をゆるやかに区切る装置ともなっている。連続するテラスには、浅く水を張って水遊びができるよう、わずかな傾斜が付けられており、ホールの大きなガラス扉を開け放つと、内部、テラス、そして季節感あふれる庭が一体となり、子どもたちが生き生きと活動できる魅力ある空間が広がる。

卒園生の親でもある前田圭介氏は2011年の乳児棟増築も手掛けており、次々と新しいアイディアを生み出す甲斐弘美園長の思いに応え、継続的に園の環境整備に関わっている。前田氏以前にも卒園児の親である建築家やアーティストが関わりを持っており、園のそこかしこにその存在を感じることができる。その象徴として地域に向けての顔となる本作品は、デザイン賞として高く評価できる。

(小池孝子)

デザイン賞



橋口剛 (HAG 環境デザイン)、平慶生 (女の都幼稚園保育園)

女の都幼稚園保育園

園舎と園庭の敷地は斜面住宅地の一部で狭いが、保育活動の大半を占める野山は自然豊かな山地で広く市街化区域外に属している。

本園の最大の魅力はこの野山を活かした自然保育であり、晴れた日には園児が一日のほとんどをここで過ごしている。魅力的な自然要素が点在しており、1.5 km 先のヤギ小屋まで、大村湾を眺望できる視点場、果樹園、野菜畑等、都会のこどもたちにとって貴重な自然体験の場となっている。

園舎は、この野山を活かすため、住宅地側ギリギリにコンパクトに計画され、園庭との間にスパン3 m 以上の木製デッキによる軒下空間を設けることで、こどもたちを野山へ誘発する素晴らしい中間領域を創り出している。木造軸組造、木製框引戸、木板張と珪藻土等、全体をこどもにやさしい自然素材を活かした空間で構成しながら、低学年の保育室では園庭への水平方向の開放的性、高学年では大空間による垂直性を計画することで、多様な空間体験の場を形成している。

審査ではそのような自然保育に沿った丁寧な計画が高く評価されたが、園庭については、野山との境界にある垂直擁壁への対応や、軒下空間を活かした園庭全体の回遊性など、こども環境の質を向上させるための工夫が可能な要素も見られたため、今後の保育環境の更なる向上に期待していきたい。

(佐久間治)



相坂研介 (相坂研介設計アトリエ)

てぞーろ保育園

「てぞーろ」はイタリア語で宝箱。山を抱く巨大遊具のような保育園という。福島市には中心市街地の北にシンボリックな信夫山があり、この山のすぐ北の平坦地に立地。認可定員90名、一時保育7名、学童保育20名の規模。街路の微妙な曲がり、園舎の向きと界壁の角度を絶妙に変化させ人々の視線を誘う。狭い園地だが、私道上部を活用して木造2階建を可能とし、中央に大きな園庭を取り囲む。園庭は、信夫山を望み、園児の入口、靴の履き替え、送り迎えの場。周囲のコンクリートの界壁は、リズムカルな円窓が複数穿たれ、閉鎖性はない。1階に事務室、乳児保育室、調理場、ランチルーム、2階に遊戯室、学童保育室、一時保育室、保育士控室を配置。2階のひな壇テラスは、園庭を見下ろし、運動会の観客席や集会の場となる。屋上階にフットサルコートと菜園用スペースがあり、園児が立体的に回遊できる動線計画により、雨天でも十分な運動が可能。草木や土などの自然との対話、大型木製サッシの換気、衛生機器の大きさ変化対応、防寒、蚊対策、外壁や野外床面の耐久性など十分なのか疑問はあるが、世の中の変化を前提に、そのつどフレキシブルに対応することを前提にしている。総じて、保育に対する創意や情熱を十分に感じられる。

(松本直司)

デザイン
奨励賞

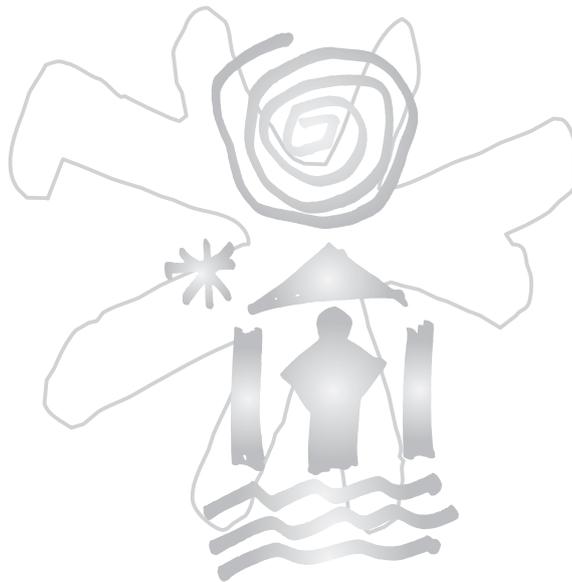
東海林健、平野勇氣（株式会社東海林健建築設計事務所）、社会福祉法人大地会（山五十嵐こども園）、田中哲也（田中哲也建築構造計画株式会社）、内藤真理子（コモレビデザイン）、佐藤将之（早稲田大学人間科学部教授）

山五十嵐こども園

非常に恵まれた環境に建つ保育園である。園舎の前には一応園庭らしきところがあり、フェンスで囲ってあるのだが、子供達はフェンスを超えた先の野原でのびのびと遊んでいる。野原には、木でできた素朴な遊具がそこここに設てある。園舎は、山型トラス谷型トラスを交差させた折板の屋根が連なった構成となっている。さらに屋根の一部に高く突き出たトップライトがあり、特徴的な外観を構成している。保育室の前の外部廊下は一部壁に覆われていて、少し守られた感じの中間領域となっている。内部は、屋根を構成する合板で覆われた木のトラスとルーバーの貼られた天井、白い天井とかなり複雑な天井に覆われた空間となっている。室内の設えも木の部分と白い部分が共存し複雑な構成となっている。全体的には非常に要素の多い保育園であると思った。ここまで複雑にする必要があるかは別として力作であると思う。寺院が母体の園ということもあり、地域に開かれた保育園を目指し、設計段階から教職員とワークショップを重ねた成果が随所に現れており、心配りが感じられた。

コロナ禍で実現できていないこともあるとのことで、今後ますます本建築の良さを活かし、地域にとってなくてはならない場として機能していくことを期待したい。

（鮫島良一、手塚由比）



総 評

こども環境 活動賞

神谷
明宏

活動賞
選考委員長

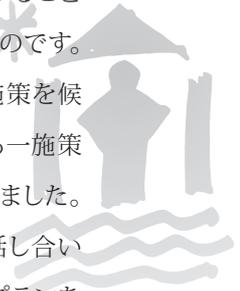
本年度の応募件数は残念ながら1件少なくコロナ感染症の影響を受けて地域における活動が制限されていたと推察できる。また、応募については活動の内容が学会の求める以下の条件に必ずしもマッチしておらず、選考委員の皆さんの意見もなかなか厳しい評価となりました。「無料の『子どもeco検定』と『子ども防災検定』の実施」についてはすでに実施され定着しつつある検定を無料でいかに展開するかという大人の活動にすぎませんし、「こどもがまちをつくったら」については日本各地で展開されているこどものまちの活動と比較をしても新鮮味に欠ける活動と言わざるを得ません。唯一、大人主導とはいうものの「色という視点で・・・」は講評にもあるようにユニークで地域密着型の新しい取り組みから奨励賞といたしました。すでに何度も申し上げてきていますが、活動賞は①一過性ではなく継続性があり、②こどもの参画による活動であること、③地域やコミュニティへの広がりがあり、④波及効果の可能性のある新しい試みであること、⑤各種の組織との協働の仕組みが生かされた活動、表彰の対象となっていることが重要な視点です。また、この活動賞は会員の皆さんの推薦によって成り立っていることを忘れないでください。どうぞ皆さんの周りのユニークな活動をご紹介ください。

活動 奨励賞

照山龍治、木村典之、幸野洋子、山崎朱実、塩月孝子（「地域の色・自分の色」研究会）、秋田喜代美（学習院大学）

色という視点で、身の回りから、子供たちと、 ふるさとの宝物を掘り起こす取り組み（地域教育・地域振興に向けて）

別府温泉がある地域の特性が生かされた活動で地域学習の面においても「色」という新しい視点での取り組みは評価できます。自分が育ち、毎日を暮らしている地域の特性を「色彩」という視点から、気づき⇒共感し⇒自分ごとにとらえていく実践です。「色」という視点から、視覚障がい者を除いて誰もが入りやすい取組みで、顔料づくりや染色などの実体験を通じながら、身近な自然や郷土文化と出会う興味深い取組みです。しかし、子どもたちのアイデアが生かされたり、先駆的な内容という点では弱いという評価もありました。さらに子どもたちが主体的に取組み新しく何かを創るというよりも、活動の目標へ導くプログラムの色合いが強く、「ふるさとのたからもの」の後半ページに自分で色を調合して塗るアクティビティがあるが、子どもに渡すテキストならば、途中の様々な色を紹介するページでも、子どもが色を塗るなどの活動を盛り込んだ冊子ができるのではという意見もありました。色概念を固定化するというのは大変難しく、従って「ふるさとの色」という概念を固定化するのは困難ではないか、小学校3年生に限定することなく地域の子どもたちに広げて継続して実践し、子どもの主体的学びに発展させていただくことを期待して奨励賞となりました。（小澤紀美子）



総評

子ども環境 自治体施策賞

自治体施策賞
選考委員長
田川 正毅

「こども環境自治体施策賞」は、行政による優良なこども環境改善施策を顕彰することにより、その施策のさらなる発展と、他の自治体における施策の活発化も期するものです。会員から推薦された施策と、本学会の「子育て自治体委員会」から推薦された施策を候補とし、本審査委員会が選考する仕組みとなっています。本年度は会員推薦による一施策について、8名の審査委員に外部審査委員1名を加えて委員会を開催し審査を行いました。

今回の施策は、市だけではなく県と教育・保育実践者や研究者など関係者が話し合いを重ね、工夫し納得を得ながら、主に教育・保育の質に焦点をあてたアクションプランを策定していくプロセスで、「奨励賞」にふさわしい内容として選定いたしました。公立・私立・幼稚園・保育所・認定こども園といった設置形態の枠にとらわれず、自然保育の推進・公開保育の実施・保育コーディネーターの育成と連携・幼保小の連携等に取り組むものです。この施策の策定が令和3年でその成果が未だ明瞭になっていないことから奨励賞としましたが、多くの関係者が共に目指す方向を丹念に醸成する施策への取り組みが高く評価されました。この取り組みによる成果が、こどもの視点や成長のあり方などから多面的に評価・検証されていく仕組みも備えることで、さらに持続的な質向上への取り組みに繋がることと考えます。

自治体 施策奨励賞

東広島市長 高垣廣徳

関係機関が一体となった乳幼児教育・保育の質向上に向けた取り組み

待機児童の解消という保育の量的な課題がある程度解決されつつある今日、保育の質の向上は、基礎自治体における全国共通の課題となっている。乳幼児教育・保育環境の充実について各地で様々な取り組みがなされているが、本施策は以下の諸点で優れている。

一つは、トップダウンではあるが、学識経験者、行政トップからなる座談会での保育現場の意見聴取、関係機関・関係者からなる「子ども・子育て会議」検討部会の設置等、「アクションプラン」策定に向け、ていねいに合議形成の手続きを踏んでいる点である。二つ目は、行政、保育者、保護者、研究者等幅広い組織、人材が連携協力して「アクションプラン」を推進している点である。プランの基本目標にそった、教育・保育の質向上に向けたさまざまな取り組みが計画実行されており、今後、保育コーディネーターの育成等によって、市民の教育・保育に対する主体的な関わりがさらに広がっていくことが期待される。以上の点から、本施策は「こども環境自治体施策奨励賞」にふさわしいと考える。

課題を一つ上げるとすれば、本施策の推進・評価にこどもの視点をどのように取り入れるかであろう。こどもの主体的参画により本施策がさらにバージョンアップすることを期待したい。

(河原啓二)

